

## 板谷家伝来資料と住吉・板谷家の仏教絵画制作

瀬谷 愛（東京国立博物館）

「板谷家伝来資料」（以下、本資料）とは、江戸幕府御用絵師板谷家に伝来した絵画・歴史資料 1 万点あまりの資料群である。東京国立博物館は平成 22 年（2010）3 月、板谷家八代目にあたる日本画家板谷廣起（1907～2008）氏より本資料の寄贈を受け、翌 23 年度より分類整理と板谷家作品の調査を進めてきた。本発表では、今年度末にその総合的な成果を報告、公開するに先立って、板谷家と本資料全体の概要について紹介し、板谷家とその本家住吉家の原点のひとつである仏教絵画の制作と古画学習、美術史的位置づけについて試論を述べたい。

板谷家とは、住吉広守（1705～77）の門人であった住吉広当（板谷慶舟のち桂舟、1730～97）が、住吉家から分かれて一家を起こしたものである。広当は安永 2 年（1773）に幕府へ召し出され、同 6 年（1777）後継者のいない広守の後に住吉家を継いだ。天明元年（1781）に自らの長男広行に住吉家の家督を譲り、天明 2 年（1782）に板谷家として分立した。御用絵師として狩野派や住吉派とともに御用に応え、桂舟（慶舟）広当、桂意（慶意）広長、桂舟広隆、桂意広寿、桂舟広延、桂意広春、桂舟広永、本資料の寄贈者である慶意広起まで続いた。

そもそも土佐派を源流とすることから、本資料には源氏物語、平家物語などの物語絵や歌絵、鷹狩図などのやまと絵資料が多くみられるが、他に山水図、花鳥図、人物図、写生図、地取図など画題は様々に及んでいる。また、鎌倉絵巻、土佐派、狩野派、中国画家の作品を写した模本類も含まれ、全体としてやまと絵／漢画の区別なく存在するのは、本資料が住吉・板谷家の資料以外に、ある時期、縁戚関係にある御絵番坊主彦根家（岡本善悦／狩野豊久）、やまと絵絵師栗田口家の資料を取り込んだことにも起因する。そして、これらの多様な資料の中に仏教絵画もまた一定数含まれている点に、発表者は注目したい。

板谷家の本家にあたる住吉家は、土佐広通（1599～1670）がすでに断絶していた「住吉社絵所」の「住吉法眼慶恩」の家を再興し、住吉如慶を名乗ったことに始まった。住吉法眼慶恩とは、建長 6 年（1254）「絵過去現在因果経」（根津美術館他所蔵）の筆者である「住吉住人介法橋慶忍」と、鎌倉時代初期に南都で活躍したと伝えられる絵師「住吉法眼」のイメージとが合成されたもので、これに「住吉社絵所」の属性が加味されたものと考えられる。如慶とその子具慶は、後水尾院や天海らを通じて社寺縁起絵、祖師絵伝などの仏教絵画を制作し、住吉法眼慶恩の後継であることを意識した作画活動を行なった。本資料内の「住吉慶恩筆不動利益縁起絵巻模本」は、住吉広守が慶恩筆と鑑定した「不動利益縁起絵巻」の模本で、板谷家においても画祖を意識した古画学習が行なわれたことがうかがえる。また「諸仏絵 住吉如慶具慶下画写」と外題のある図像集や、新潟・普光寺山門天井画「飛天図」の下絵、「稚児文殊像」の下絵もみていきたい。